



Title	育児期共働き夫妻の役割関係：家庭役割が妻に偏るカップルの調整プロセスにみる
Author(s)	孫, 詩彙
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 139, 111-124
Issue Date	2021-12-24
DOI	10.14943/b.edu.139.111
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/83805">http://hdl.handle.net/2115/83805</a>
Type	bulletin (article)
File Information	07-1882-1669-139.pdf



[Instructions for use](#)

# 育児期共働き夫妻の役割関係

## — 家庭役割が妻に偏るカップルの調整プロセスにみる —

孫 詩 彥\*

【要旨】 共働きであっても、夫と妻がそれぞれ稼得と家庭役割に力点を置き、いわゆる家事育児が妻に偏る「不平等」な形で役割分担をしているカップルが多い。本研究はこのパターンのカップルに焦点を当てて、分担を調整するプロセスにおいて示された夫妻の役割関係を検討した。その結果、次のことが分かった。まず、「妻が家族の活動を手助けする存在」という従来の研究が示した夫妻の役割関係に加え、「夫が妻をサポートする」側面を明らかにした。これはミクロレベルのジェンダー秩序を揺らがせ、夫妻間の動的な調整を可能にする基盤として捉えられる。ところがこの役割関係は、夫妻のみで家庭を営む場合に成り立つものであり、この関係を維持するため祖父母など外部の協力と距離を保つ必要がある。この限界によってマクロのジェンダー構造を変えるのに不十分で、ジェンダー家族の脆弱性をも露呈させている。

【キーワード】 役割関係、調整プロセス、夫妻のペアデータ、偏る分担

### 1. はじめに

本稿は、共働きでありながら、夫と妻はそれぞれ稼得と家庭に力点を置く形で役割分担しているカップルに焦点を当てている。いわゆる家事育児が妻に偏る形で、「不平等」な役割分担をしているカップルを研究対象としている。このような分担状況にたどり着くまで、夫妻が役割分担をどのように調整してきたのか、このプロセスに現れる夫妻の役割関係を明らかにし、ジェンダー秩序の観点から検討することが本稿の目的である。

夫妻の役割分担の状況は長い間、ジェンダー平等を把握する重要な指標として用いられている。「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性別分業から、「男は仕事、女は仕事も家庭も」という新・性別分業に対する批判を経て、「男も女も、仕事と家庭」、いわゆる共働きで家事育児も分担する夫妻が新たな理想像として期待を寄せられている。

しかし、共働きであっても家庭役割の分担が不平等のままであることが、数多くの実証調査によって報告された。これに対して、役割分担は在宅時間や収入格差などの相対資源に規定されるという先行研究の知見を引き継ぎながら、共働きであっても夫妻間の差がまだ十分縮小していない観点から、偏る分担を説明する研究がある。夫も妻も収入を得られる意味で「共働き」カップルは増えたものの、両方ともフルタイムで働き、キャリアアップを求める「共キャリア」カップルがまだそれほど増えていないと主張する研究者もいる。また、女性は就労する形で社

会に進出したことは、必ずしも不平等なジェンダー構造が取り崩されていることを意味するわけではない。従来の研究では、女性に偏る役割分担のうらに、男女間の抑圧関係が存在すると懸念されている。

こうした懸念は最もだが、これまでの研究は議論する際にほとんど、夫妻の役割遂行の時間と頻度で分担の状況を測定し、家庭役割が妻に偏るという「結果」に焦点を当てている。この「結果」に至るまで、夫と妻の間でどのような調整をしてきたのか、この調整を通して夫妻間ではいかなる役割関係が構築されているかがまだ十分検討されていない。社会全体からして不平等なジェンダー構造が存在していても、ミクロの夫妻間では、あくまで家庭生活を営むための利便性や合理性に基づいて実践している。この点を踏まえて夫妻はどこで、どのように折り合いをつけているかを明らかにする必要がある。本稿はこうした問いに対して、家庭役割が妻に偏るカップルの調整プロセスに注目して検討する。この検討を通して、はたして共働き家庭においてもジェンダー秩序が引き続き不平等な形で維持されているか、それを取り崩すための手がかりはどこにあるか、を考えることができる。

本稿は、まず次章で先行研究の整理を通して問題の所在を明らかにしてから、分析データの説明をする。その後、事例の紹介と分析をする。夫妻が役割分担を調整するプロセスにおいて、夫たちの役割分担実践がいかなるものかを検討する。ミクロ的に見れば、夫たちのこの実践には、ジェンダー秩序を取り崩す力を内包している。この点を指摘してから、第5章はマクロレベルでジェンダー秩序がいかに全体として維持されているか、家族と役割分担に潜む課題を検討する。

## 2. 先行研究と問題の所在

家事育児など、家庭役割の分担が妻に偏る形でなされることは、長らくジェンダーや家族研究の文脈において批判されてきた。そのなか、妻の社会進出が見られるものの、ジェンダー秩序の解体が必ずしもできているとは限らないことを鋭く指摘したものがある。

江原（2001）は、構造と実践が相互に依存し、影響しあう「二重性」の議論から、家族（＝夫婦）というジェンダー体制において、男性（＝夫）、女性（＝妻）をそれぞれ、家事育児を「しない」と「する」というカテゴリーに結び付けるジェンダー秩序が存在すると論じている。性別分業はジェンダー秩序の最も根本にある事象として、「男は活動の主体、女は他者の活動を手助けする存在」という形で秩序を表している。この秩序に基づく夫と妻の実践がまた、家族というジェンダー体制において特定の形の役割分担を生み出している。こうした理論枠組に基づき、実証調査のなかでも、平等な分担を望みながら現状を受け入れざるを得ず、理想と現実の不一致に直面する妻たちの姿が描かれている。この意味で、「ジェンダーの『自然』の仮構の上に、性的欲望や生命と労働力の再生産の仕組みを作り上げる、『家族』をめぐる政治がある」と、牟田（2018：11）は「ジェンダー家族」と名付けて検討している。

ところが、夫妻のこうした役割分担の状況を単に抑圧や不平等として捉えるには不十分である。ジェンダー平等を追求していくにあたり、ジェンダー秩序を取り崩すことが必要であるものの、偏る役割分担が抱える課題とそこに秘めるリスクの解明が第一歩に過ぎない。近年の研究では、夫妻の関係、ならびに役割分担そのものを動態的にとらえる視点を取り入れられている。

船橋は、他人の手助けをするという立場を甘受しないで、夫と交渉して夫妻間の均衡点を作り出そうとする妻の実践に目を向けている。この実践を、船橋(2004)は「新しいジェンダー契約」と呼んでその重要性を論じた。育児に積極的であると自認する男性とそのパートナーを対象に、夫妻の育児役割の分担と調整を検討した。その結果、カップルが常にジェンダー秩序の影響を受けていながらも、夫妻が相互に抑圧しない関係を追及していく動的なプロセスが平等主義につながると指摘されている(船橋2006:240)。

このように、妻の主体的な実践に注目することを通して、妻の行動や意識が夫の分担を規定する可能性が検討されるようになった。当事者(特に妻)がパートナーとの役割分担に関して、公平だと思うか、その不公平をいかに感じるかによって交渉行為が異なる。不破・筒井(2010)の研究によると、この不公平感自体が当事者と周囲の基準に依拠して決められるものである。すなわち、社会全体が「不平等」な役割分担を肯定する傾向を示す場合、または当事者の認知において自分の家庭は周囲の家庭より平等である場合、不公平感が緩和される。

また、意識レベルだけではなく、こうした当事者の認知は実践においても表れている。例えば、妻のゲートキーピングにより、夫の家事参加を抑える可能性が指摘されている(中川2018)。この理論仮説は、共働きの妻が稼得役割のほかに家庭役割も主に担うという、二重負担の原因を説明している。また、同調査では、妻が夫の家事を褒めたり夫に家事を教えたりして夫の家事参加を促すことと、夫の家事の量と質を統制する妻の行動も明らかにされた。

さらに、妻の意識や実践を規定する、家庭役割と対置する立場にある稼得役割の影響も見逃されてはいけない。小笠原(2005)は、同じフルタイムで就労を継続する共働き夫妻であっても、稼得役割に関する分担意識が異なるものであると指摘した。そのうち、分担意識の低い夫妻は妻より夫の仕事を優先にし、家庭と仕事の両立は妻によって営まれるものである。夫妻の2人とも稼得役割に関して分担意識を持つ場合のみ、両方の協力で就労を継続するための調整を行うことが分かった。

ここまで妻を中心として議論がなされてきた。一方、夫を調査対象とした研究で、男性が家庭役割を取得するプロセスの複雑さと難しさを示したものがある。高山(2016)は、夫の家事遂行には、「共働きであれば家事も分担すべき」という夫のジェンダー平等的な意識だけではなく、結婚前から家事をする経験や家事スキルも必要である、と指摘した。夫は多くの場合妻の家事基準に合わせて行動するため、どれだけ家事をしたという実態のみならず、家事を自身の責任として内面化しているか否かの意味づけが重要であると示唆した(高山2016)。

以上の研究では、①役割分担は動的に調整するものであり、そのなかから新しいジェンダー契約(=夫妻の役割関係)が生まれる可能性がある。②妻の能動的な交渉や夫の行動を統制する実践が描かれる。

こうした知見を踏まえ、孫(2019, 2020a, 2020b)は夫妻双方を対象に、結婚から育児期にかけて夫妻間の役割分担と調整を検討した。その結果、夫妻間の役割分担は偏るだけではなく、子どもの誕生と成長につれて、偏った形で役割分担が硬直化していることが分かった(孫2020a)。すなわち、役割分担をめぐる夫妻間の交渉・調整が低調になる。この原因に関して、夫妻間では顕在的権力の作用が次第に潜在的権力、不可視的権力へと移行し、夫妻とも意識しない権力作用で妻が家事育児の主な担い手である状態が維持されている(孫2019)。一方、育休の取得に着目すると、子どもが生まれると夫と妻はそれぞれ異なる家事育児の経験をしたため、夫妻間で役割の互換と代替がむずかしくなることも指摘された(孫2020b)。

孫の研究によると、①に関して、役割分担は動的的に調整するものでありながらも、調整自体の低調化が見られる。②に関して、夫妻間の相互作用や影響しあう様子が観察されるものの、そこに見えない権力作用や互換・代替の難しさも存在している。したがって、役割分担の「結果」という観察可能な形で新しいジェンダー契約の成立が確認されていないカップル、いわゆる家庭役割が妻に偏るカップルであっても、ミクロの夫妻間でなにかしらの交渉と調整を行い、偏った役割分担の形に落ち着いた可能性が考えられる。ところが、夫と妻はどこで、どのように折り合いをつけたのか、このプロセスをめぐる検討が十分なされていない。とりわけ夫・男性はこのなかでどのような位置づけで、いかなる形で家庭役割に関わっているか、夫妻とも納得しているように見えるこの「偏った」役割分担にどのようなリスクが潜んでいるか、これらについて、夫妻が役割分担を調整する実践が社会構造や周りの人々との関連・応答において考える必要がある。

### 3. 本研究が用いるデータ

本稿の議論で使うデータは、未就学の第1子を育てる育児期の共働き夫妻双方を対象とした調査から得たものである。調査は2017年10月から2018年4月にかけて、日本と中国の都市部にある複数の保育施設経由で協力者を募集し、20組（夫妻40名）に半構造化インタビューを行った。調査では役割分担の状況や調整のプロセス、本人が役割分担と調整に対する捉え方などについて聞き取りをした。

協力を得た20組のカップルは、調査時点の家事育児分担の状況から3つのグループに分けることができる。夫と妻が半々に分担、もしくは同時に家庭役割を進めるという「夫妻分担グループ」（7組）。夫がほとんど家事育児に手を出さず、家庭役割が妻に集中する「妻集中グループ」（4組）。そして一応夫妻で分担しているものの、家事育児が妻に偏り、何かある時も妻が率先して対応する「妻中心グループ」（9組）である。夫が家事育児の中心的な役割を担うことは特定のライフステージ（妻の妊娠から出産後の間など）に表れていたが、調査時点の役割分担状況からは見られなかった。

本稿は「妻中心グループ」の9組（うち日本4組、中国5組）を中心に分析する。すなわち、本稿の分析対象となっているのは、家事育児をそれほど「平等」に分担していないカップルのことである。調査時点で9組のカップルは、夫も妻も正規雇用であり、妊娠後期のD妻が出勤日数を減らしている以外、全員フルタイムで働いている。このグループに焦点を当てた理由は主に下記の2点にある。

第1に、「夫妻分担」と「妻集中」の形で役割を分担しているカップルは、夫や妻個人の調整によらない要因の影響も大きいものである。相対的に平等な役割分担を実現しているカップルは、夫も妻も協力的だけではなく、勤務時間が短くて自己裁量の余地が大きいことや、家事育児代行サービスを利用するなどの原因もあげられる。一方夫がほとんど家事育児に手を出さない場合、夫妻間の収入や在宅時間に大きな差があり、もしくは夫妻とも性別分業を肯定することが原因である。こうした要因が夫妻の役割分担と調整に及ぼす影響をもちろん検討しないといけないものの、別紙に譲りたい。

第2に、いわゆるこうした「平等」と「不平等」な役割分担の両極端の間にある最も多くのカッ

ブルは、本稿が焦点を当てている「妻中心」のグループである。このグループの夫と妻は、必ずしも現在の役割分担を理想としているわけではないが、この分担に至るまで一定の調整プロセスをたどっていたことが考えられる。一方、こうした役割分担から抜け出て、より平等な分担を目指すカップルも、果たしてどれぐらい調整の可能性を持っているか、ジェンダー構造のなかで検討する必要がある。

「妻中心」の形で役割分担をしているカップルに着目することで、本稿は妻に偏る分担にたどり着くまで夫妻間の調整と、折り合いのつけ方により絞る形で検討できるようになる。従来の研究はこのパターンの役割分担を説明するとき、妻の立場から出発するものが多い。本稿は夫が自分の分担をどのように位置づけ、何をしているかに力点を置き、夫妻のペアデータで分析することが特徴である<sup>1</sup>。分析は、調査協力者の語りにおいて役割を担うための努力や、役割の担い方・分け方を中心にして行う。

本稿が用いる「妻中心グループ」の9組の調査協力者のプロフィールを下記の表で示す。そのうち、AからDまでが日本調査で得たデータであり、EからIが中国調査で得たデータである。異なるフィールドでデータを集めているが、本稿は中日の比較ではなく、共通の傾向に注目して検討するものである。

表1 調査協力者の基本状況

	No.	年齢	学歴 <sup>①</sup>	年収 <sup>②</sup>	健康状態	住居	子ども	祖父母の居住地と協力の有無
日本調査	A夫	30代	大学	600	良好		長男6歳 持家 長女4歳	県内・協力なし
	A妻	30代	高校	400	不調		次男2歳	市内・協力あり
	B夫	30代	大学	600	良好	賃貸	長女5歳	県内・協力なし
	B妻	30代	高校	500	良好		次女3歳	県内・協力なし
	C夫	30代	大学院	600	良好		長女6歳	県内・協力なし
	C妻	40代	大学院	400	良好	持家	長男3歳	県内・協力なし
中国調査	D夫	20代	短大	450	良好	持家	長男2歳半	県内・協力なし
	D妻	20代	大学	50	妊娠			市内・基本なし
	E夫	30代	大学院	40	良好	持家	長女3歳半	省外・協力あり
	E妻	30代	大学	16	定期通院			市外・協力あり
	F夫	30代	大学	80	良好	持家	長男4歳	省外・協力あり
	F妻	30代	大専	50	良好			×
	G夫	30代	大専	30	良好	持家	長女4歳	省外・協力あり
	G妻	30代	大学	10	良好			省外・協力あり
	H夫	30代	大専	20	良好	持家	長男5歳	市外・協力なし
H妻	30代	大学	6	良好			市外・協力あり	
I夫	30代	大学	14	良好	賃貸	長男3歳	市外・協力なし	
I妻	30代	中専	20	良好			市外・協力なし	

①学歴のうち、大専は技術専門大学、中専は技術専門高校を意味する。

②年収はいずれも税込みで、日本調査は「日本・円」、中国調査は「中国・元」で表記する。

<sup>1</sup> ペアデータに関して孫(2020a)では、同じ手法を用いているが、権力の観点を主に使うことと、権力作用によって偏る分担が受動的に受け入れられる側面を中心に描かれている。これに対して本稿は、夫妻間の権力関係ではなく、夫も妻も家庭生活を営むために行動する観点から、夫妻間の役割関係を中心に検討するものである。

## 4. 夫妻で役割分担を調整するプロセス

本章では、夫妻がどのように役割分担を調整しているか、事例の紹介と分析を進めながら、調整プロセスに現れてきた夫妻の役割関係を示していく。

### 4.1 家族をサポートする妻

#### (1) 家事の大半を日常的に担う妻

調査データの説明で述べた通り、「妻中心グループ」のカップルは、家事も育児もその半分以上が妻に負担されている。また、そのなかでも特に毎日決められた時間に行われるルーティン作業を、妻が多く行っている。

例えば夕飯を作るようなことは、スキルや単なる在宅時間の長さのみならず、在宅の「タイミング」が重要かもしれないと指摘されている（久保2017）。つまり、家族で食事を始める前に帰宅し、料理を用意する時間が必要である。この作業は時間的にあまり調整する余地がなく、後回しすることもできない。特に小さい子どもを育てる家庭では、子どもの生活リズムを保つことを前提に、夫妻で役割を分担することになる。この意味で妻たちは、ルーティンな役割遂行で家族の生活を支えている。

B妻「仕事が終わったらもうダッシュで家に帰って、車を出して迎えに行きますね。子どもを連れて帰ったら、(子どもに) おかずを出しながらこっちでバーッと料理を作って、夫が早く帰ってきたら家族で一緒に夕飯を食べる」。

#### (2) 子どものニーズに合わせて行動する妻

育児役割に関して、本稿が焦点を当てているカップルはいずれも、子育てに夫が参加している。ただし、役割分担の詳細を見ると、夫たちは日常的に子どもを世話するより、遊び相手や送り迎えなどを担当することが多い。子どもの寝かしつけやお風呂、温度に合わせて服を調整したり、夜泣きに対応したりするのは、ほとんど妻たちである。

I夫「子どもはいつも僕が連れて遊びに行くから、保育園のイベントとかも、全部僕が行っているし」。

I妻「お父さんは携帯ゲームがすごく好きなんだから、息子連れて遊びに行くって言ってもゲームしながらなんです。この前、息子がどっかに遊んで行って、いなくなったのに、(お父さんは)ぜんぜん気が付かず…。仕事で疲れたと思うけど、(ゲームばかりして息子を一人遊ばせるより) 息子に読み聞かせとかをしてもいいのになあって思うけど、まあ。料理とかは全部私がつけているし、息子はお肉が好きだから、そういうのをよく作るけど、(お父さんが息子の面倒を見てくれないときとか) どうしても時間がなかったらラーメンとかだけでも、なんとかなる」。

子どものニーズや状況に合わせて妻たちが動いていることは、保育園に預けた子どもが急に病気になった時、いつも妻が休みを取って子どもを迎える様子に如実に現れる。

C妻「私ですね。…二人半々で休むのは、立場上無理なんだからね。仕事を考えると」。  
C夫「だいたいお母さんですね。一応職場として抜ける」。

以上のように、妻がルーティンな家事遂行で家族生活を支え、また子どもの世話を担い、子どものニーズに応答する主役である。ここでは、「妻→子ども（家族）」という家庭内の役割関係の図式が見えてくる。これは従来の研究結果とも一致している。

ところが、夫たちが担う役割について、いかに位置づけられているものか。夫自身と妻たちの語りから、単にジェンダー秩序が示したように、「女性は男性の行動の手助け」ではなく、また通常で考える夫妻がともに子育てするような図式でもない。そこには、「妻→子ども（家族）」に加えて「夫→妻→子ども（家族）」が見えてきた。夫は妻をサポートする立場である。

#### 4.2妻の育児サポートとして家事をする夫

調査のなかで夫たちは、わずかながら家事を一部ルーティンに分担している方がいる。これよりも多くの場合は、「言われたらやる」「状況を見てやる」で家庭役割に関わっている。小さい子どもがいると、食べさせることやオムツ替えをすることなどすぐ対応しないといけない、いわゆる繰延不可能な役割が多い。その都度対応しているのは、前述通り妻たちである。そこで育児役割に迫られる妻のサポートとして、夫たちの家事が位置づけられている。このことは、調査から分かった。

G夫「(子どもの)寝る準備をするときは、お母さんがお風呂に入れたり、歯磨きしたりするけど、私は隣で雑用係として待機。着替えてきた子どもの服とかは、ベランダに置かれるので、それを手洗いして」。

A妻「私は早く帰れる日であれば茶碗洗いとかもするけど、でもやっぱり帰りが遅くて子どもの寝かしつけもあると、明日の残すのも仕方ないからいいやって思っても、でもお父さんが帰ったら全部やってくれるね」。

こうした夫の家事分担は、ルーティンではなくその場の状況次第で変わることが多い。この特性によって遂行している本人も妻も必ず「夫が家事を分担している」と認識していない可能性がある。また、なぜこのような形になったかは、夫の勤務時間や夫妻双方の在宅タイミング、子どもの性別、夫のスキルなどの要因を総合的に考慮して調整してきた結果である。

##### (1) 勤務時間

まずは夫妻の勤務時間の長さや在宅のタイミングの問題である。比較的に女性は男性より勤務時間が短くて定刻退勤の仕事につく割合も高い。そのため、日常的な家事は妻を中心に担われ、夫たちは帰宅してから家庭役割に参加する形になることが多い。

A妻「私よりも夫が遅くまで仕事をしているので、それで(夫が帰ったら)お茶碗洗って、夜も洗濯するので」。

D夫「嫁も疲れているので、夜(僕が家に帰ったら子ども)の遊びは基本僕ですね」。「休む日とか、自分が料理できるなら作るし、なるべく嫁が休める環境にしたいね」。



C夫「産後一カ月間くらいはわりと私が全部やっているので、お母さんが（体調回復して）できるようになったら、そっちが全部やるようになりますね」。

E妻「家にいる時間が長いし、帰る時間も早いので、その流れで私がやっています」。

## (2) 子どもの性別

この点に関して従来の研究ではあまり分析されていないが、子どもの性別によって、夫妻の育児分担が左右されることを本調査で明らかになった。特に子どもと同じ性別の親の分担が促され、場合によって異なる性別の親が世話役割から排除されることも起こりうる。例えばEカップルは娘のお風呂と被服管理を妻に任せる形で分担していた。その場合、夫が妻をフォローして洗濯を分担している。

E夫「うちは女の子なので、お風呂はお母さんに任せていて、私は子どもの着替えだけを手洗いして、ほかは洗濯機に入れて洗いますね」。

E妻「娘だから、お父さんに任せられないこともね、お洋服買いに行ったりとか、お風呂とか、やはり私がメインにやるから」。

## (3) 夫のスキル

在宅時間・タイミングと子どもの性別のほか、夫の家事スキルも影響要因の一つである。夫が妻ほどの家事スキルを持たず、日常的な役割遂行をあまり担っていないものの、妻の手が回らないときの「予備軍」として、夫が動き出す。

D夫「料理は最低限、うまいかは別に、食べられるものは（妻が手を回らない時に）作っているね」。

D妻「ご飯作るのは夫ね、作れないです。焼きそばとカレーは作れるから、それでいいんだったら、俺が作るみたない感じで、やってくれて。子どもが生まれて、私が、余裕がゼロになって、夫がいろいろやってくれました」。

その際、夫たちは必ずしも「妻に言われたから」、「しかたないから」といった理由で、受動的に家事を引き受けるわけではない。子どもの誕生や成長していくなかで妻をサポートする能動的な姿勢は見られる。

H夫「洗濯についてよく妻に言われて、男の人って、こういうところが大雑把なんだから。妻はね、服の色とか、布の生地で分類したり、どんな干し方が跡を残らないとか、よく言われて、生活に関してたくさん教えてくれたよ、妻に。教えてもらったからその通りにやるし、よく言われるから私もだんだんできるようになった」。

D妻「彼が一番好きなのは、私と子どもです。だから私と子どもが求めるのは彼のなかで一番重要なんですよ」。

A妻「旦那さんはやさしいし、子どものためではなく、まず私のためにやってくれていました」。

#### 4.3セーフティーネットとなる夫

家事や育児の第一義的な責任者は妻である点で変わらないものの、夫の休暇を家族のために使われ、妻が休めないときのセーフティーネットとして活用されていることがある。ただし、その特徴として、「計画性」があげられる。前述で子どもの急病時はほとんど妻が対応しているのに対して、事前に予定を立てられる子どもの運動会や行事などは、夫が参加することが多い。

A夫「あらかじめ決まったことについては、私のほうが休むことが多いですね。この日に病院連れて行くとか、(事前に分かれば)基本私のほうが調整してやるし」。

E夫「私の方が、仕事は多いけど急な案件が少ないから、コントロールしやすいですね。だから事前に分かれば休みは取れるし、幼稚園のなにに会も全部私が参加するし」。

Fカップルは夫妻間の分担とその都度の調整に関して、次に述べている。

F夫「今のポジションは時間の調整ができるから、応急処置としてはすぐ対応できますね。『一カ月間ずっとやれ』って言われたら無理だけど、主な責任は妻にあって、でも協力が必要だったらいつでも私を呼べばいいから」。

F妻「旦那さんも自分の仕事があるから、手伝ってほしいと言わない限りは、自分のことに集中するね。一人でも大丈夫だって(夫は)思っているから。ただずっと言わないままだと、相手もぜんぜん問題なくできるよねって思われちゃうから、そこは、チームで動かないといけないね」。

ここまでは夫妻双方の語りから、役割調整をしてきたプロセスのなかで現れてきた役割関係を中心に検討した。その結果、妻は主に子どものニーズに合わせて行動する従来の図式に加え、夫は自分を妻のサポート役として位置付けるパターンを描き出した。

このパターンにおいて夫たちは勤務時間やスキルなど、複数の要因による制限があるなか、他人(妻)の手助けをする機動係になることで、家庭役割に加わっている。この実践は次の意味でジェンダー秩序を取り崩す力を内包するものとして捉えることができる。

江原(2001)によるとジェンダー秩序の主要構成要素である性別分業は、二つのレベルにおいて機能する。一つはあらゆる社会的場面において「他人の手助けをする活動(=人の世話をする活動)」を一方の性別カテゴリー(=女性・妻)と結び付けること。いま一つは男性(=夫)の性別カテゴリーがつねに主体的な活動、女性(=妻)の性別カテゴリーがその活動を手助けする立場に振り分けること、である。

これらに対して本稿の分析は、新しい図式が存在を示していきたい。妻は子どもや家族(夫を含め)をサポートし、その活動の手助けを担っている。ただしこれと同時に、夫が自分を妻の手助けとして位置づけていることが明らかになった。この点は従来の研究で十分検討されていないが、前述一つ目のレベルにおけるカテゴライズを取り崩そうとしている実践として考えることができる。同時に、こうした機動係やセーフティーネットとしての夫がいることで、妻たちには余裕がないとき一部の役割遂行をしない、相手に任せるという選択肢を得

た。一見、家事育児の第一の責任者は妻である点で変わりがないが、このように選択肢が増えること自体、妻・女性が主体的に活動する可能性を広げる。これに対して夫・男性は、勤務時間や自身のスキルといった制限があるなか、妻の家事や育児といった役割遂行の状況に合わせて行動し、結果的に妻の手助けをしようとすることは、特定の性別カテゴリーの立場を相対化する効果を持つと言える。

以上を踏まえ、ジェンダー秩序を取り崩すことは「男が家庭、女が稼得」のような完全に性別分業をひっくり返すことではなく、少しでも従来の構造を緩め、選択肢を増やすことにこそ重要な意義を持っている。

## 5. 夫妻の役割調整の実践が抱える限界と課題

ところが、なぜ結果として「妻中心」という形の役割分担が観察されるか、こうした分担に潜むリスクと限界はどこにあるか。本章はこの点を中心に検討する。

これまでの検討をすこし敷衍すると、上記のパターンで夫妻が役割を調整する際、勤務時間や家事スキルなどの制限が常にあることは忘れられない。また、ミクロのレベルでは、夫と妻の間に限ってジェンダー秩序が緩み始めたとしても、マクロレベルのジェンダー構造が全体的に維持されてしまう仕組みが存在する。そこに「ジェンダー秩序のベクトル」(船橋2006:239)が常に存在している。これは次の点において現れている。

まず、性別分業のもう一方にある稼得役割について、共働きの夫妻であっても職場の環境や男女に対する配慮、休みの取りやすさや勤務時間・内容が異なる。夫妻間で「急病対応は妻、計画的な休暇は夫」と振り分けていても、その大前提として夫があまり急な休みを取れない状況に変わりがない。また、世間の規範や周りの目を夫妻がどのように捉えているかも、役割の担い方に現れてくる。これに関してB妻の語りが鋭い。

B妻「取りやすい、取りにくいのは同じだと思います。でも旦那のほうは、融通効かないでしょうね、奥さんのほうが休みやすいですよって、世間的に思っているの。旦那さん自身もそう思っているかもしれない。それに私も自分の子どものことだと思って、なんかある時は私が行くってなって、余計にそうなるよね」。

夫妻間の調整のみで対応することで、夫妻外部の職場環境や「世間の目」を変えていないだけでなく、時折夫妻で調整する「自由」を保つため、あえて外部と距離を取る必要もある。

本調査は祖父母がかわりに家事育児をやることで、夫妻間の分担に影響する可能性を防ぐため、あえて調査時点で祖父母と同居していないカップルを対象とした。ところが聞き取りの中、夫と妻が「あえて祖父母と距離を取る戦略」を使っていることが分かった。それは祖父母に実際家事育児の協力をしてもらわなくても、相談や話し合いだけでも、夫妻の役割分担行動が第三者である祖父母に介入され、左右される可能性があるからである。

B妻「旦那がね、自分の家庭は自分でっていうこだわりがたぶんすごくあって、実家に帰るとかもあまりしないし」。

F妻「できれば（祖父母と一緒に暮らしたり協力を得たり）しないほうがいい、役割の分担だけではなく、家庭そのもの、夫妻の関係そのものが大きく影響されるから。祖父ちゃん祖母ちゃん的生活習慣や意識が、こっちに影響を及ぼしてくる」。

C夫「祖父母に聞かないけど、妻のお姉さん夫婦に聞いたり、会社の先輩とか、保育士の先生とかに聞いたりしますね。子どもの育て方とか。祖父母はやはり世代が違うので、聞いても科学的な理由がないと納得できない」。

G夫「三人家族のなかでは、妻が家長の立場にいますね。でもうちの両親が来たらやはりこう、私たちが息子を育ったからみたいなの、雰囲気になっちゃって、だから新しい家族には第三者が入らないほうがいいよ、親であっても」。

ここでは、夫妻が第三者による影響を避けるため、あえて距離を取ったり、祖父母からの協力を断ったりしている。もしくは同世代の家族や知り合い、専門家とのやり取りは相談レベルに留まり、これ以上の介入に抵抗を抱いている。

以上のように急な出来事の対応を含めてすべての役割遂行を夫妻内部で完結し、そのうえ意図的に外部との付き合いや外部からの協力と距離を取る形で、夫妻はミクロ的なジェンダー秩序の取り崩しを少しずつ進めている。しかしこれは、夫妻二人のみの危うい営みで成立しているものである。夫妻は片方が倒れた時などの予想できない出来事が起こると、外部から支援やサポートを得にくいハイリスク状態に陥りつつある側面を、見逃してはいけない。

## 6. おわりに

本稿は共働きでありながらも、育児期の家庭役割が妻に偏る形で行われるカップルに焦点を当てている。こうした一見「不平等」な役割分担をしているカップルがどのような調整プロセスを経ており、夫妻間でいかなる役割関係を構築しているかを検討した。

これまでの研究では、女性が他者の活動を手助けというジェンダー秩序の現れ方と一致する形で、「妻が家族をサポートする」、「いざとなる時に緩衝材として機能する妻」の存在を描きだしている。これに対して孫（2020a）は、同じ家庭で暮らしている夫妻双方を対象にすることで、夫妻間で役割分担を調整することがなされているにもかかわらず、子どもの誕生につれて調整が低調になることを示した。その一つの原因として、夫妻間の互換と代替が次第に難しくなるも示唆されている（孫2020b）。

こうした全体像が捉えられてきた一方、本稿は妻に偏る形で役割分担をしている夫妻に絞り、ミクロレベルで夫と妻の間、どのような調整プロセスで折り合いをつけ、この状態を受け止めているかにフォーカスして検討した。その結果、「妻が家族の活動を手助けする」という従来の研究がすでに解明した図式に加え、「夫が妻をサポートする」という側面を明らかにした。本稿は夫妻のペアデータで分析したため、この夫妻の役割関係の全体像を示すことができた。なおこの役割関係は、フルタイムで共働きながら家事育児が妻に偏る状況を説明するために重要である。

ここでいう夫によるサポートは、主に妻が家事育児を担い、手が回らないときに夫が動員され、セーフティーネットとして機能することである。妻が家事育児の主な責任を担ってい

る点で変わらないが、緩衝材となるのは夫のほうである。そこに在宅時間やタイミング、子どもの性別とスキルが夫たちの分担を制限しているが、それでも「家族生活を支える妻と、妻のサポートを担う夫」という夫妻間の役割関係は、夫と妻が役割分担を調整する実践においてたどり着いた「均衡点」である。夫はこのような形で家庭役割に関わるチャンスを得ることができ、いざというときに備えて一定のスキルを身に着けている。この実践において夫は子どもやほかの家族のため、というよりも、自分を妻の手助け役に位置づける傾向がある。このことは、夫が意図的に妻との協働関係を結ぶ実践であり、妻に焦点を当てていた従来の研究で十分検討されていない。これはマイクロレベルのジェンダー秩序を取り崩そうとした有意義な試しでもあると、さらなる議論が期待できる。それに、マクロレベルでジェンダー秩序や男女の役割関係が検討されているのに対して、マイクロレベルで夫妻の実践は、あくまで家庭生活を営む際の合理性に基づく行動である。この観点からも、本稿が明らかにした夫妻の役割関係が結果として偏る分担を説明することができる。

そしてこれはより平等な役割関係を構築するためのつながりにもなる。この役割関係は裏返せば、男性が家庭内活動の主体になっていないことを示している。家庭外の、女性の活躍促進のみならず、家庭内における男性の主体的な活動も同時に進める重要性が示唆されている。

一方、マイクロレベルでジェンダー秩序の再調整が夫妻の間でなされるものの、全体的にジェンダー構造は維持され続けていることも指摘せざるを得ない点である。本稿は、結果的に偏る役割分担をしているカップルを対象にしているが、それでもこの役割分担の結果は、夫が意図的に妻を抑圧したり妻に家事育児を担わせたりするより、むしろ夫妻が調整を試みながらたどり着いた結果として捉えることができる。言い換えれば、この結果は、夫妻内部で課題を解決しようとし、夫妻のみで家庭を営むことでたどりついた「合理的」な実践パターンである。夫と妻と子どもでできているジェンダー家族は、一見オーソドックスな家族の形であるにもかかわらず、実は大人二人だけ育児を含む家庭運営が構造的に脆弱的である（牟田2018：8）と、とてもリスクな存在である。

なぜ夫と妻は自分たちだけの力で家庭生活を営み、そしてこの状態においてのみ前述の役割関係が見えてきたのか。本稿の分析によると、夫と妻たちは役割を調整するときは勤務時間やスキルなど、いわゆる客観的で実在する要因に制限されるだけでなく、近隣や周りの人、世間一般のやり方ならびに目線にも影響されている。夫と妻が認知する「一般的なやり方」に偏る役割分担へと導かれる可能性がある一方、こうした認知を変えるチャンスが得られにくい。例えば子どもが小さく、家事育児の量も膨大だった時期に、祖父母からの協力が期待されている。ところが、こうした協力を得ることは同時に「他人のやり方」とすり合わせることも引き起こす。夫妻以外の第三者が入ることで、これまで夫妻間の役割関係が取り壊されてしまう恐れがある。特に祖父母の場合、世代のファクターも影響している。「家族生活を支える妻と、妻のサポートを担う夫」の役割関係は、このような第三者の参入で容易に崩れてしまう。このため、夫妻はあえて外部と距離を取って家庭内の役割関係を維持している。これはマクロのジェンダー構造を維持・存続させるものになる。なおこうした形自体は、夫妻と子どもでできる核家族がもしものときに、助けを求めにくい・得にくい原因になっている。

このことを踏まえ今後の課題として、実際急な出来事が起こる時夫妻の対応とその限界を

検討する必要がある。第三者からの協力も、比較的と同世代なら夫妻が抵抗感を持たないことや、夫妻間の役割関係が影響されずに済むことが考えられる。この意味で夫妻の家事育児サポートとして、祖父母からの協力よりも「横のつながり」を強化する必要性が考えられる。一方、コロナ感染拡大など予測できない事態で同居家族以外の人との接触が制限される中、家族生活のリスクも大きくなるかもしれない。なお、妻を中心に家事育児のやりくりがなされてきたことは、夫の役割分担をいかに制限するか。また、夫妻双方は役割の担い方の相違により、家事育児の範疇やその量と質の捉え方にどのような違いがあるか、についても検討する必要がある。これらは今後の課題にしたい。

### 【注】

- ・本稿は2021年比較家族史学会第68回春季研究大会で発表したものを、加筆し修正したものである。
- ・本稿が使うデータは、基盤研究C「『女性の貧困』を捉える：世帯内資源配分に着目した実証研究の方法の開発」(課題番号16K02030 研究代表者：鳥山まどか)の資金を使って得たものである。調査は北海道大学教育学研究院倫理審査委員会の承認を得たものである。調査の実施と分析は研究倫理規定を遵守する。
- ・本稿は若手研究「家事分担をめぐる調整：未就学の第1子を持つ夫妻のペアデータを用いた実証研究」(課題番号21K13413 研究代表者：孫詩彥)の一部である。

### 【引用文献】

- 久保桂子 (2017)「共働き夫婦の家事・育児分担の実態」日本労働研究雑誌 689：17—27
- 江原由美子 (2001)『ジェンダー秩序』勁草書房
- 高山純子 (2016)「共働きの夫の家事役割意識：妻との相互作用に着目して」家族関係学35：47-60
- 小笠原裕子 (2005)「有償労働の意味：共働き夫婦の生計維持分担意識の分析」『社会学評論』56：165-181
- 孫詩彥 (2019)「家事育児の分担に見る夫と妻の権力経験：育児期の共働き家庭の事例を用いて」『家族社会学研究』31 (2)：109—122
- 孫詩彥 (2020a)『権力の観点から見る夫妻の役割分担：未就学の第1子を持つ共働き家庭に着目して』北海道大学大学院教育学院博士論文
- 孫詩彥 (2020b)「家事育児分担に関する夫妻間の調整可能性：育児休業に着目した分析」北海道大学大学院教育学研究院紀要137：171—191
- 中川まり (2018)「共働きの妻における家事のゲートキーピングと夫の家事参加との関連性」日本家政学会誌 69：789-798
- 不破麻紀子・筒井淳也 (2010)「家事分担に対する不公平感の国際比較分析」『家族社会学研究』22：52-63
- 牟田和恵 (2018)「ジェンダー秩序の解体と新しい『家族』の創造」大原社会問題研究所雑誌722：3-16
- 船橋恵子 (2004)「平等な子育てにむかって：夫婦で育児の四類型」国立女性教育会館研究紀要8：13-23
- 船橋恵子 (2006)『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房

## Role Relationships among Dual-earner Couples in Child-Rearing Period

-The Coordination Process of Unequal Division Couples

SUN Shiyu

### **Key Words**

Role-Relationships; Coordination Process; Paired Data of Couple; Biased Division of Domestic Labour

### **Abstract**

Many couples who have dual employment have an “unequal” division of labour, in which the husbands focus on earnings and while the housework and childcare are biased in favor of the wives. This study examines the role relationships exhibited by couples with this pattern in the process of coordinating the division of labor. The findings are as follows. In addition to the role relationship between husbands and wives, in which “the wife is the one who helps with family activities”, “the husband supports the wife” aspect was clarified. This can be seen as a basis for fluctuating the gender order at the micro level and allowing for dynamic coordination between husbands and wives. However, this role relationship can be established when only the husband and wife run the household. In order to maintain this role relationship, it is necessary to keep a distance from outside help, such as grandparents. This limitation makes it insufficient to change the macro gender structure and also exposes the vulnerability of gendered families.